

國際射的大競技

小酒井不木

青空文庫

昨年オランダに開かれたオリンピック大会で、わが日本選手が三段^{だん}とびの第一等に入選したとき、私^{わたし}たち内地の日本人がどんなに喜んだかは、おそらくまだ皆^{みな}さんの記憶^{きおく}にあらたなるところであると思います。あの新聞記事を読んだせつな、思わずも私の目には熱^ない涙^{なみだ}がたまりました。すべての競技がそうでありませうけれど、なかんずく国際競技ほど人の血をわかし肉をおどらすものはありません。

今からおよそ五十余年^{むかし}の昔、普仏戦争^{ふふつせんそう}の起こるすこし前、フランス陸軍省の主^{しゆ}権^{けん}でパリ^{パリ}の郊^{こう}外^{がい}に射^か的^{てき}大会^{たいかい}が開^{かい}催^{さい}されました。当時フランスには世界各国から軍事研究者が留学^{りゅうがく}にきて

いて、わが日本からも十人余りの士官が派遣され、それらの人々が射的大会に招待されたのでありますから、いわば国際射的大会となったわけです。

当時日本人は、欧州人から見れば、まったく眼中になかったのであります。日本という国さえも認められてはいないくらいでした。そうして、日本人そのものはといえ、欧州人よりも体格は劣るし、有色ではあるし、言語も不自由であるから、自然軽蔑されたのも無理はありません。

けれども日本人には、祖先伝来の日本精神があります。いかなる困難とも戦つて、あくまで目的に進むという尊い精神があります。その精神がことごとくにあらわれますから、当時の滯留士

官も、さほどの屈辱を受けずにすみしました。その証拠には、射的大会へ招待されたのでもわかりません。

大会へ招待されたのは、当の仏国のほかに、英、独、露、伊、スペインにち西、日の六カ国でした。前日予選が行なわれましたが、仏、英各三人、独、露各二人、伊、西、日各一人が選にはいっただけでありました。この予選にはいった十三人が、翌日晴れの競技を行なうことになったのであります。日本人で入選したのはMという陸軍工兵大尉でありましたが、予選の点もはなはだふるわず、かろうじて入選したくらいでありました。

その日、同僚の士官たちは、M大尉をかこんで、

「おいM、明日はしっかりやってくれ、日本人の名声をあげるに

は絶好ぜつこうの機会だ、どうか祖国のために万丈ばんじょうの気炎きえんをはいてくれ！」

と、口をそろえて激励げきれいしました。

M大尉エムは、歩兵銃ほへいじゆうの研究にきていたのでして、いわば射撃しゃげきでは専門家なのです。M大尉は静かに語りました。

「ありがとうございます。おおいに注意して見苦しい成績はあげぬつもりだ。今日の不成績きょうようは、ひきょうない方だが、銃じゆうがよくなかったというよりも、ぼくの使った銃じゆうの研究がたりなかった。明日あすの競技につかう銃はここへ貫もらつてきてあるから、これから諸君しよくんとともにこの銃の研究にゆきたいと思う。いっしょにきてくれないか」

だれも異議いぎのあるはずがありません。一同は、射的場しゃてきじょう近く

の野へ出て、M大尉エムたいいの射撃しゃげきえんしゅう演習えんしゅうを手伝いました。ごしよ
ちのとおり、銃には一本一本違ちがつた個性があります。同じ人間が
作つくつた銃でも、それぞれ、その弾道だんどうだとか、着弾距離ちやくだんきよりだど
かがちがいます。それゆえ、射撃を行なう前には、銃の個性を十
分研究しなければならぬのであります。

M大尉エムたいいはおよそ二時間あまり熱心に研究しました。的いを射い
は、弾丸たまのあたつた場所をしらべて研究すること、数十回におよ
びました。

「よし！」

最後にM大尉はきつぱりといいました。

「明日あすはだいじょうぶだ！ けつしてヒケをとらぬつもりだ！」

そう自信ありげな口調に、士官たちは歓声をあげて引きあげました。

いよいよ大競技の当日がきました。四月の空はうるわしく晴れて、遠くに見ゆる伽藍の塔が絵のようにかすんで見えました。早くも観衆は場外にあふれ、勇ましい軍楽隊の合奏が天地に響き渡りました。

はるか二百メートルをへだてたかなたに十三個の的が土手の前に並び立っております。こちらから見ると、まるで一点にしか見えません。それほど当日の的は小さかったのであります。普通は大きな的で、あたり場所によつて点数がきまるのですが、この日は、あたれば十点、あたらねば零点、しかもわずかに三発しか

与えられていないのであります。

先^まず十三人の順序が抽せんによつて定められました。すると、
どうであろう、わが^{エムたいい}M大尉は縁起悪^{えんぎ}くも最後の十三番となりました。西洋では十三という数を忌^いみきらいます。その忌^いまれてい
る数を、日本人が引きあてたのです。わが^{おうえん}応援の士官たちも思
わず顔を見合わせましたが、M大尉の顔はりんとして輝^{かがや}いている
だけでしたので、人々はまずあんど^{むね}の胸をなでおろしました。

いよいよ第一番のドイツ人が火ぶたを切りました。ドン！ と
一発。

人々はかたずをのんで、^{いこう}的の下の壕からの合い図を待ちました。
赤い旗が出て上下に振^ふれば十点、黒い円形の弾痕指示器^{だんこんしじき}が出て左

右に振れば零点なのです。

ヒヨイと出たのは黒い指示器。それが左右に振れました。ああ！

ついで第二番、第三番と進みましたが、いずれも零点ばかり、最後にM大尉の番になりました。ああ。見ていた日本士官たちの心はどんなだったでしょう。

やがてドンと一発！

おお！ 赤い旗が上下に！ 揺れる揺れる。

わッ！ という歓声は天地を轟かしました。日本士官は思わずも抱き合つて踊り上がりました。しばらくはすべての人の拍手が鳴りやまなかつたのであります。この光栄、この名誉！



ついで第二回目になりました。第一番のドイツ人はみごとにあてました。それからあたらぬ人とあてた人が相伯仲し、最後にM大尉の番になりました。人々はいっせいに注目しました。

ドン！

ああ、あわれ、黒い指示器が。

士官たちの歎き！ けれども当のM大尉はすこしも落胆しないのみか、にっこりとしておりました。

ついで第三回。その結果二十点を取ったものはドイツ人とフランス人が一人ずつで、スペイン人が零点。あとは十点ずつでした。もしM大尉があてれば、三人の決選になります。

そのときの応援士官の心持ちはどうでしたでしょう。日本の

名誉はこの一発にかかっております。

ところがです。あわれにも第三回の発射はっしやには黒い指示器が左
右に振ふられたのであります。

審判官しんぱんかんはまさに宣言をくだそうとしました。

そのときM大尉はつかつかと進みよつて、りゆうちようなフ
ランス語で大声に申しました。

「審判官しんぱんかん殿どの。私わたくしはたしかに三回とも的を射いあてました。けれ
ども、それは壕ぐうの中ちゆうにいる人にわからなかつたのであります。第
二第三の弾丸たまは第一の弾丸のつらぬいたあなを通つたはずです。
どうか土手どてを掘ほつて弾丸の位置をおしらべてください」

このことばに人々はM大尉エムたいいが発はつきよう狂きやうしたのではないかと思

いました。けれども自信ある態度におかすべからざる威厳があり
 ましたから、審判官は、大尉のねがいをききました。

やがて土手が掘り返されました。

見よ、そこには三発の弾丸がねずみのように重なっていたでは
 ありませんか。

この奇蹟！ この妙技！

再び起こる喝采の声！ かくてM大尉は第一等の栄冠を
 得て、予定通りわが日本のために万丈の気炎をはきました。

(昭和四年四月号)

青空文庫情報

底本：「少年倶楽部名作選」³ 少年詩・童謡ほか」講談社

1966（昭和41）年12月17日発行

底本の親本：「少年倶楽部」講談社

1929（昭和4）年4月号

初出：「少年倶楽部」講談社

1929（昭和4）年4月号

※表題は底本では、「国際射の大競技」〈こくさいしやてきだいきようぎ〉」となっています。

※樺島勝一（1888（明治21）年7月21日～1965（昭和40）5月31日）

の挿絵を同梱しました。

入力・・・sogo

校正・・・noriko saito

2017年3月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

国際射的大競技

小酒井不木

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>